

氏 名	谷 本 尚 子
学位(専攻分野)	博 士 (学 術)
学 位 記 番 号	博 乙 第 94 号
学位授与の日付	平成 13 年 3 月 26 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
学 位 論 文 題 目	国際構成主義の研究 —ドイツ及び東欧におけるロシア構成主義の変容— (主査)
審 査 委 員	教 授 太 田 喬 夫 教 授 大 橋 良 介 教 授 河 邊 聰

論 文 内 容 の 要 旨

今日、20世紀前半の欧米におけるアヴァンギャルドに対する見直しや再評価が依然として行われているが、本論文は、ロシア構成主義が1920年代西側において受容される過程で成立した広義の構成主義運動ともいえるべき「国際構成主義」の諸相を多角的な視点から考察しようとしたものである。それは、とりわけベルリンをはじめとするドイツの各地、および東欧諸国においてロシアの主流派とは異なる独自の多様性を示すアヴァンギャルドとして展開していった。

本論文の目的は、国際構成主義の成立および各国各地でのその展開を明らかにするとともに、造形芸術の各ジャンルにおける造形上の特色と構成主義の今日的意義を解明することにある。

本論文は、序、第1部、第2部、第3部および結語から構成されている。

序では、国際構成主義とはなにかが問われ、先行研究が詳細に検討される。

第1部では、国際構成主義の成立と各国・各地域での構成主義運動の諸相が扱われる。

1-1ではロシア構成主義の成立と展開が述べられる。構成主義の動向をロシアでの成立過程と、ドイツ、ハンガリー、チェコ、日本での多様な展開とに大別し、それらを歴史的に検証した。1-3では、「構成主義インターナショナル」結成に向けて二つの国際会議が取り上げられた。1922年は実質的に国際構成主義が成立した年である。この年、重要な二つの国際会議、すなわち「デュッセルドルフ進歩的芸術家の国際会議」と「構成主義者-ダダリスト会議」と国際芸術展がドイツ各地で開かれたからである。これらの会議とそれに付随して開かれた国際芸術展により、ロシア構成主義が西側ではじめて大々的に紹介されるとともに、西側でのアヴァンギャルド運動、例えばデ・スティールやダダ、ハンガリーの「マ」のグループ、それにロシアの反主流派らの積極的な人的交流がなされた。これを機会に「構成主義インターナショナル」に署名した芸術家達は、各地で別々に活躍するようになり、国際構成主義運動は新たな展開を見せる。

国際構成主義の特色の一つは、ダダと構成主義との密接な補完関係である。実際の作品の造形面でも理論上でも密接な関係にあった。

1-4ではベルリンでの構成主義としてリヒターと雑誌『G』が取り上げられた。また1-5では、ハンガリーの構成主義と機関誌『マ』が取り上げられ、さらに1-6では、チェコの構成主義としてタイゲとポエティズムが取り上げられた。また、1-7では、日本における構成主義の受容として村山知義と「意識的構成主義」が取り上げられた。

第2部 国際構成主義と造形芸術では、西側の構成主義、およびロシアの反主流派の造形芸術作品の作品分析を行い、その特色を明らかにした。2-1では、国際構成主義の造形理論の根底にエレメンタリズ

ムというものがあることを明らかにした。そのあと、絵画、彫刻、建築、それに写真、タイポグラフィーにおいて、それぞれ特有の造形上の特色が、主にロシア主流の実用的な作品との比較の上で明らかにされた。

第3部 ポストモダンから見た構成主義では、歴史上の20年代の構成主義をひとまとまりのものとして捉え、それをポストモダンの視点から再評価ないし解釈しようとする。その際、3-1では、D. ハーヴィッツの論考が取り上げられ、3-2では、アメリカにおけるロシア構成主義の受容として、H. フォスターの論考が取り上げられ、3-3では、モホイの造形思考の一解釈として、M. R. デップナーの論考が取り上げられた。これらの論考の批判的考察から、国際構成主義を代表する作家達の作品（彫刻）が、透明性と同時に不透明性をもつこと、また、ロシア構成主義の西側での受容は、非実用的側面のみが受容された点に、最大の特色を持つことが指摘された。さらにモホイの造形思考は、1970年代以降の現代アートの特性やデジタル時代の文化環境を先取りしており、そこにひとつの今日的意義があることが指摘された。

結語は、本論文全体の結論であり、各章で得られた成果の総括を行い、将来への展望、課題をも示した。

論文審査の結果の要旨

バウハウスやデ・スタイル、あるいはロシア構成主義に関する内外の先行研究は多く存在する。しかし、20年代ロシア構成主義が西側に受容される過程で成立、展開した多様な構成主義運動を総合的に考案した研究は、少数にとどまる。本論文は、こうした西側での構成主義運動を「国際構成主義」という名称でもって、その歴史的展開と造形芸術における作品分析、アクチュアリティを問おうとしたもので、注目に値する。特に膨大な文献資料を収集し、それを批判的に考察した点は評価できる。

本論文のすぐれた成果を以下指摘する。

1. 複雑なロシアシ構成主義運動そのものをタトリン、ロトチェンコ、ガンに代表される主流派とガボ、マレーヴィッチ、リシツキーに代表される反主流に大別し、この両者の西側への受容の違いが国際構成主義運動の全体の性格を決定づけたという指摘は注目できる。
2. 1922年に焦点を当て、ロシア構成主義がドイツ各地において受容される過程を綿密にたどった研究は、これまで日本にはなく評価できる。
3. 国際構成主義を特にダダの運動と理論上および作品のうえで相互に補完関係にあったという指摘も注目できる。
4. 雑誌『G』は重要な構成主義の文献であるが、原資料を用いてのその綿密な全体像の考察は評価できる。また、ハンガリーやチェコの構成主義が、ドイツのそれとの対比で独自の特色を持つことが明らかにされた点も評価できる。
5. 第2部では、エレメンタリズムを国際構成主義の芸術論の根底にあるものとして捉え、そのさまざまな諸相を具体的な作品分析を通して明らかにしたが、とくにモホイの写真について受容美学や触覚論と言った新しい視点からの考察は評価できる。これによってフォトグラム、フォトモンタージュ、カメラ写真についてのモホイの構成主義的な造形思考の特色が的確に示された。
6. 第3部においては、取り上げられた3つの論考は、いずれも日本ではじめて紹介される論文であり、その構成主義についての解釈は、現代アートおよびデザインを考える上でさけて通れない重要な問題を有していることを明らかにした点、評価できる。

本論文の内容は、申請者単著の以下の学術論文において公表されている。

1. 谷本尚子「ハンガリーの行動主義と機関誌『MA マ』—二つの構成主義を巡って—」意匠学会学会誌『デザイン理論』第37号、31頁-44頁、1998
2. 谷本尚子「構成主義と光の造形—モホイ＝ナジの写真—」美学学会会誌『美学』第51巻第2号、61頁-72頁、2000